念仏と法難に関する一考察

小泉宗之（出雲路派）

一

歎異鈔十二章を読み、「故聖人の仰には、この法をば信ずる衆生もあり、謗る衆生もあるべしと仏説きおかせ給ひたることなれば、我はすでに信じたてまつる、又人ありて謗るにて仏説まことなりけりと知られ候……云々」これはかなり私をして驚ろかせた御文であった。そうした中に、本願文及び本願成就文をみると、そこにだけ唯除五逆誹謗正法がある。そして信巻別序と比較してみると、内容的に全く一致していることに気がつく。ことに「忻浄邦徒衆厭穢域庶類雖加取捨莫生毀謗矣」にいたっては、いよいよ私をして味わい直してみる必要を痛感せしめられたのであり、お聖教へ目を通させる機縁になったのであった。

さらに、信巻には難化の三機、難治の三病があるし、逆謗摂不釈、曇鸞大師の逆謗摂不問答がある。

こうした御文を拝読するにつれ、大事な所に本願並びに本願成就文における唯除五逆誹謗正法の精神が述べられているのはどうしたわけであろうか。真宗の安心が信じ難い故のためであろうか。つまり難信の度合いの深さを知らせ

るためであろうか。この私の疑問を解明しようとするには、余りにも自分勝手の制限を感ずるので、その糸口として「このような見方も出来るではないか」ということの一端を記して見たいと考える。

二

古来、法難についての研究は、多くの歴史書の中にある。「法難」ということばの意味においてもいろいろ検討を要するかも知れないが、真宗だけの法難をまとめてあるものとしては、福永氏の「親鸞宗団弾圧史」があげられよう。しかしこの場合の法難は、必ずしも私が申し開きをしたい「法難」といえない面もあるようである。なぜなら、真宗史における法難の背後には、必ずしも「念仏と法難」における法難ではなく、政治的な、あるいは領土的野心の転嫁であるという面も感じられるからである。

そうした意味において、「念仏と法難」についての論書は余り見うけられないのではないだろうか。極論のお許しを願えるならば、「お念仏を信じ、お念仏申す所に、法難はつきものである」――「念仏と法難は不離一体のものである。」今日私の申し上げたい「念仏と法難」――のいわゆる法難のないのは、元祖ならびに、宗祖の時のようなお念仏のないためである。――と申し上げたいが、如何であろうか。

三

文化が発達すれば、文化が乱れ、教育が発達するということばがあるとすれば教育の根本を誤まり、経済が発達すれば、エゴによる社会崩壊しかない社会の中において、真に時代を救うべき道は、学問的観念ではなく、また律法的な教団論ではなく、念仏の実践でしかないように思えてならない。そしてそれは、決して他宗がいわれるような方便

としての念仏ではなく、念仏そのものの真実性の顕現であり如来の本願である。称力による時代救済でなく、如来の本願力の作用に俟たねばどうしようもないと考える。曇鸞大師がいわれる如く、第一義諦は仏の因縁法なり、入一法句は清浄句なり、不虚作住持功徳成就は蓋し如来の本願力なりとあり、また、心々相続無他想間雑と力説しておられる所から拝察すれば、一心無疑の念に相続することは、如来の招換の勅命そのものでなければならぬ。宗祖は唯信鈔文意の中に「応称は称うべしとなり」という所からも明らかではないだろうか。

今日の真宗のおおよその流れとして、一般に真宗は社会を救う力がないといわれたり「法義の現代的意義をのべる一益法門的なあり方」が風靡し「布教並びに行事に走り、また観念化している」といわれているが、その背景には、三業惑乱、口称正因説が原因しているように思えてならない。まことに衣裳を気にして、骨の髄をとられたような思いをするのであるが、如何なものであろうか。

歎徳文の中には「自修の去行をもって兼ねて化他の要術とす」とある。自らの念仏の姿は、念仏が諸仏に護念せられているのであるから、念仏の一人働きによる外に仏法繁昌の方法がないと思われる。自らの念仏の姿が、同時に化他の要術でなければならぬ。されば如来の作用そのものでなかろうか。念仏は信心において確証される――（救われる）のであり、念仏は自らの信心の観念を打ち破って信楽の世界に導くものである。同時に願生の心は、浄土に遊ぶ報恩行として、この生涯を荘厳されるもののようである。

四

前節までにおいて、今日お念仏申すということの少ないがための所感を述べた。「念仏と法難」の論理は、念仏往生の道に限って「本願三心と抑止門」の論理と一致する。口伝鈔に「抑止は釈迦の方便なり」とあるが、どうも私の味

わいとして解せない。祖聖の信巻の流れから判断しても、抑止は方便でなく本願そのものである――と頂戴したいし、法難によって仏説の確かさを仰がれた祖聖の姿を思い出す。

「この法をば信ずる衆生もありそしる衆生もあるべしと仏説きおかせ給ひたることなれば、我はすでに信じ奉る、又人ありて謗るにて仏説まことなりけりと知られ候、しかれば往生はいよいよ一定と思い給ふべきなり」

何とも力強い、そして生涯を荘厳された生きた如来の妙用に唯々感佩の外はない。念仏と法難について、この十二条及び第二条を眺める時、自ら聖人の御生涯が目に浮ぶ。

聖人老齢にして、昔を憶い今をふりかえる時、瓦礫きょうこくの中にあって、信謗の恩讐を超えて（性信房あて）念仏への道を祈られている。そのことは更に高僧讃の中に二首、正像末讃の中に六首あげられている。このようにして祖聖の場合、「主上臣下、法に背き義に違し忿を成し怨を結ぶ」（承元の法難）と義憤を洩されながら、法難、善鸞事件、学者の疑難を、「仏かねてしろしめされ」た煩悩具足の身と、法益の方に転嫁されているように思う。そしてそれは弥陀の本願なのだと感佩しているように思えてならない。「南無阿弥陀仏に値いまいらせ給ふこそありがたくめでたく候、御果報にては候なれ。とかく計はせ給ふことのゆめゆめ候べからず」（末灯鈔）仏の願力のまにまに、信順を因とし疑謗を縁とされて、念仏に値遇せられた喜びに浸っていられたと考える。

五

目を転じて、明治以後において念仏せられた人々の中にはどんな有名な方がいられるのであろうか。

七里恒順師のことは、仏教大辞彙及び七里和上言行録の中に記録され、その業蹟については周知のことである。その七里師も、一世に令名をとどろかせた頃は、法難らしきものはなく、明治の高徳として讃えられている。その七里

師も執行をやめて自坊に帰られ、信心の復興、念仏相続に励まれ、全国より道俗がたずねるようになると、「称名正因、自力称名」とさわがれたようである。明治二十四年顕如上人三百回忌の御遠忌布教は、安心調べを兼ねていたといわれる。その七里師も喧騒の中を、布教後逃れるように京都を後にせられたという。（機関誌真仏教所載）

村田静照師のことについては、「ねぐさり」「聖師点描」「鈴木大拙全集」「大拙選集」の中に紹介せられてあるので、周知のことと考えるが、伊勢の地から一歩も外へは出られず、専心専念高声念仏の生涯を送られたと聞く。またその化に浴した人は、有名無名の道俗数限りないといわれている。そうしたことが、安心調べとなったようだし、いまだに「自力称名、称名正因」の名が有力であるといわれている。

こうしたことは、念仏往生の本願のままに生きることが、難信の法として捉えるべきではなくて、本願念仏の実践道が、遭遇しなければならない当然の批判の道というべきではなかろうか。そしてそのことが、人間の全存在を試練するという意味において法難として受けとめるべきが至当のように思えるがどうであろうか。その意味において、七里師、村田師の生涯は「念仏と法難」の現代版として、改めて自らの反省としている。その他無名の念仏行者の中には、多かれ少かれ、批判を浴び、皮肉られ、罵しられて、生活され、その上からいよいよ仏恩の深重なるを悲喜していかれたのではないかと、心ひそかに考えているものである。

まことに、信心を具した称名念仏は、称えざる常識知識人、観念律法化した人々からは批判される。――しかもそれが念仏実践の外見から見る故、まことに痛烈であろう。しかし念仏はそれ自身、観念と常識を破り去る如来の働きそれ自体なのであろう。つまり人間の根底をゆるがし、根本否定の上に輝く念仏なのであるから、理論ではなくて実践がもたらす人間真実の当然の帰結に外ならない。――と考えざるを得ない。その辺は一枚起請文によっても明らかであろう。

六

かくして、祖聖の場合、法難によって如来の生きた説法の確かさとして領知されたのでなかろうか。そのことは指摘を受けた如く、われらには難信の法として領受されていいのでないかと思う。更に飛躍的に論ずる勝手が許されるならば、法難をうけるから難信の法だといえようし、法難をうける人が万人に一人であるから、難信の法だという受けとめ方もなされようか。

従来信仰体験の論理体系として二河譬があげられている。その心理的表現は実に妙を得て至当であるが、今までの例から見るとその殆んどが個人的往相の意味でしか語られていない。それと似ているものとして「玄奘の旅行記」、藤田宏達氏の「原始浄土思想の研究」があげられるのであるが、その個人的往相の姿はそのまま如来の光明の中にいることを表現されている。私にいわせるならば、それは単なる心理的描写ではなくて、仏教的原理が個人の上に表現されて来る実際であり、誰しもが通らねばならぬ体験真実であり、貧慎二河はむしろ社会の実相であると表現して無理であろうか。

然れば、社会の痛烈なる批判は（法難）愈々行者の願生をより堅固なるものへと確信して行くであろう。なぜならば「謗るにて仏説まことなりけりと知られ候」であるからである。

何はともあれ、広略相入の深い法味が、念仏の実践行の中に味わえることであるし、西方願生せしめられゆく中に、広大な力を感ぜしめられている。

思考不足、説明不足は重々承知している。忙々多々のご容赦を願うと共に、諸賢師のご教示あらば望外の喜びとするものである。